

関西大学考古学等資料「古銭」資料紹介

角 田 芳 昭

本学考古学資料室には考古、民俗、歴史、自然科学等資料約一万数千点を所蔵しており、これら貴重な資料は、学界はもとより、本大学関係者へも未発表のものが多く、学術報告書としての発表が待たれている。

このほど中国、朝鮮、我が国の「古銭」資料一千三百余点の整理が完了したので、若干の解説を加え紹介してみたいと思う。

本資料は昭和四十年三月杉山恭子氏より購入したものであり、中国古銭八百余点、朝鮮古銭若干数、日本古銭四百余点、外国銭若干数があり、貨幣史、経済史はもちろん、史学研究資料としても非常に参考となるものである。資料は活用されてこそ価値があるもので、死蔵されるべきではない。卒業論文、学術研究論文等必要であれば、利用していただきたい。

資料の内、中国銭は八十数種におよび約七割をしめている。これらの中より平常目にとまりにくい珍しい貨

幣を紹介してみることにする。

古代中国において、いまだ貨幣が鑄造されない時期は、子安貝（寶貝）を貨幣として使用しており、殷代の実物が多量に残っている。貝の字は子安貝に象かたつてなど書き、貝はおかねなる故、財、資、貨かたなど貝のつく文字は財産に関係がある。貝を分けると貧となるのも道理である。又貝は礼物にも使用されたので、賞、賜、寶などの例も見られる。中国上古の貨幣中、今日存するものは貝幣、銅幣、布幣、刀貨、錢貨の五種類である。それでは古い時代順に若干の資料を上げてみよう。

刀銭（写真1・2）刀貨は利器より造られ、形状、文字等により、尖首刀、明刀、円首刀、直刀、斉刀の五種に分けられている。斉刀銭、明刀銭各一枚があり、斉刀銭は「斉」の国の刀銭であり、田氏の発行したものである。陽面は斉公化とあり、「公」は法であり「化」は貨の意味であろう。陰面は「行」と刻されている。又明刀

銭は刀の面に「明」の文字があることにより名付けられ、燕の国のものといわれている。背文は一二三、十千、十二支等諸々の文字が刻されているが、本学のものには「八」と刻している。

布銭(写真3) 方肩方足布銭であり、読んで字の如く布の肩と足との形方になっておりこの名がついた。本学のものは安陽布銭で、背文に「安陽」と篆書し、河南省で造られたものである(前四六〇年頃)。この種布銭は、多量に铸られたと思われ、中国各地の地名を篆書したものが見つかっている。

蟻鼻銭(写真4) 鬼臉銭ともいわれ、扁平卵形の青銅銭で一方に小孔がある。ふくれた表面に文字があり、顔のようなので「鬼臉子」とも呼ぶ。あるいは「口六朱」、「各一朱」とも読まれるものもある。分布からみて戦国期の楚の貨幣とされる。上は半の字の略、あるいは𠄎と造られ貝の象形の文字ともいわれている。

半両銭(写真5) 秦の始皇帝が天下を統一し重さ十二銖(半両)と定め(前二二一年) 体円で孔を開け練磨せず、小篆で半両の二字を刻している。そして従来各地にあった貝、布、刀銭貨を一切廃絶した。しかし、漢の高祖の世になると十二銖では重く使用不便のため、八銖銭と軽いものを造り、更に文帝の五年(前一七五) 四銖半両銭を铸て世に広めている。本学のもはこの四銖半両銭で、両の字の第五六七八画が人の字に似て、俗に人字

半両と称せられているものである。更に時代が下り、漢の武帝元狩四年(前一一九)に五銖銭(写真6)を铸造しており、重さ五銖(三・二五グラム)この五銖をそのまま銭文としている。この貨幣は、前漢末平帝の元始年間に至るまで铸造されて、その数二百八十億枚余なりといわれている。そのため多種類で十四・五種にのぼっている。本学の三枚のうち穿上横文銭(宣帝神爵年間(前六一〜五八))一枚、漢末のもので、四角洪文五銖銭一枚、北魏宣武帝永平三年(五一〇)のものかと思われるもの一枚がある。

貨泉銭(写真7) 新の王莽が天鳳元年(一四)貨布銭とともに铸た貨幣であり、五銖銭よりやや小さく、径二、三五センチで表に方郭をはさみ右より「貨泉」の二字を入れている。日本各地の弥生遺跡でも発見され、弥生期の年代を推定するうえに重要な資料である。

布泉銭(写真8) 北周の武帝保定元年(五六一)七月铸造された。銅色淡黄にして右より「布泉」の二字を入れ、製作は極めて精巧である。他に武帝は「五行大布」銭二種を造っている。周書武帝紀に「保定元年秋七月更铸銭文曰布泉一以一当五与五銖二並行……建德五年春正月廢布泉」と見える。

開通元宝銭(写真9) 唐の高祖武徳四年(六二一)七月に天下の銭貨の余りにも紛乱しているので新たに貨幣を铸造した。これが「開通元宝」銭で末代に範をもたら

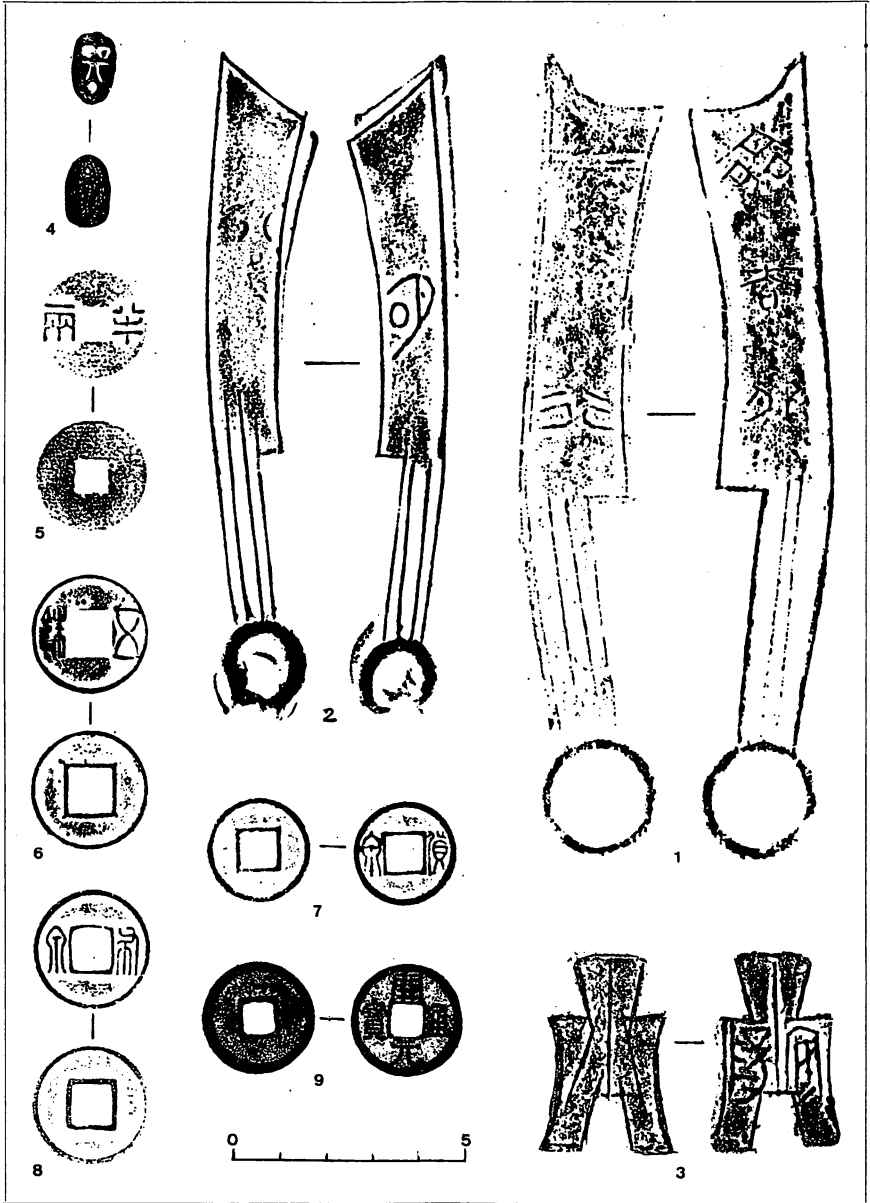
した一新紀元の錢である。この「開通元宝」錢については、古来より「開元通宝」と対読される二通りの読み方が行なわれている。現在では「開元通宝」と読まれることが常識のようになっていた。しかし元来は「開通元宝」と廻読するのが正しいと思考する。

考古学講座『貨幣』（三上香哉著）、『東亜錢志』（奥平昌洪著）によれば、当時の諸々の書物を例出し「開通元宝」と廻読すべきであると述べている。「開元通宝」と読まれる根拠は、旧唐書食貨志に「武帝四年七月廢五銖錢二行開元通寶錢。……開元錢之文給事中歐陽詢制詞及書。時稱其功其字含八分及隸體。」と見え、新唐書食貨志にも「武徳四年鑄開元通寶錢。径八分。重二銖四綮。」と見える。又南宋の洪遵の「泉志」にも開元通宝とあり、略称して開元錢と呼ばれるようになり、玄宗の鑄た錢といわれるようになった。そして五代に旧唐書編纂されて以来開元通宝と対読されるようになった。（東亜錢志）。現に先般（五十四年九月）北京より届いた「文物」にも開元通宝と書かれており、中国の学者さえ開元と対読することが常識となつてゐる。故に現代では廻読でも対読でも特に問題にせず二通りの読み方をしてゐるが、元来はどうであつたかを検討してみる必要があると思ふ。本学の開通元宝錢は会昌開元五枚を含む二十一枚を所蔵している。

次にわが国の錢貨について見ると「和銅開珎」（七〇

八年）が鑄造されて以来、万年通宝以下の「皇朝十二錢」が發行されたが、いづれも世に広まらず、中国渡來錢が使用され、慶長通宝、元和通宝も少量鑄造されたのみで終つた。寛永年間に至り各藩で「寛永通宝」が鑄造され、幕府においても二ヶ所で鑄造するに至つて、數世紀間混乱していた銅錢の統一を見た。そして幕末慶応年間まで鑄造され、ある記録によると四百億枚に上るといふ。又幕末に「文久永宝」も發行された。この間もちろん、大判、小判、丁銀、豆板銀、一分判金、二朱銀、藩札等が鑄造發行され、徳川貨幣制度が確立されていった。本学の「寛永通宝」錢は、鉄錢十五枚を含む大半が寛文江戸龜井戸錢〔寛文八年（一六六六）鑄造〕であり、背に文と刻され、俗に「文錢」と称せられており、京都方広寺の銅仏が破損したので、鑄つぶして鑄造されたものという。他に明和江戸千田新田真鍮錢、元文大阪高津錢などがある。その他天保通宝、琉球通宝は当百錢といわれる大判錢である。又鐳錢といつて民間において私鑄した錢貨で、劣悪なものであるが、これらも同時に使用されており、開元錢より渡來錢、皇朝十二錢等多くの模倣錢が鑄造された。これらの価値比率は精錢の五割から一割で、江戸時代には永楽錢一貫文に対し、鐳錢は一樣に四貫文と決められていた。

以上若干の貨幣資料を紹介したが、その他一覽表の如く、多種類の貨幣を所蔵している。貨幣の歴史はそのま



角田芳昭 関西大学考古学等資料「古銭」資料紹介参照